

短歌・俳句における「老い」の詠みぶり

藤 田 万喜子

一

平成二四年一〇月六日の朝日新聞に「高齢者こそ社会の担い手」という記事が掲載されている。国連の統計によると、世界全体の高齢化率（人口に占める六五歳以上の割合）は二〇一〇年で八%、二〇五〇年には一六%になるという。日本においては二〇一〇年で二三%、二〇五〇年には三六%と予測されている。このような時代にあって、国連は、高齢者を社会的「資産」として活用する方向性を打ち出しており、高齢者の社会参加、社会貢献がより求められるという。この潮流の中で、短詩型文学（短歌・俳句）には「高齢者」「老い」がどのように詠まれているのだろうか。本稿では、新聞投稿欄の短歌と俳句において「老い」という素材をどのように詠んだかを比較、考察したい。

二

短歌や俳句の実作者は一般的に結社に所属して発表の場を得ているのであるが、結社に属していない愛好家も投稿するであろうと思われるので、今回は新聞の投稿欄を調査対象とした。

量的に「老い」が短歌・俳句でどのくらい詠まれているのだろうか。調査した結果、短歌では一九八九首のうち一〇六首で、五・三二%、俳句では二〇〇二句のうち五九句で、二・九四%であった。高齢化社会と言われ「老い」に関心があると思われたが、両者とも一割に満たない数であった。しかし、俳句における入選句数の約二倍が短歌で入選している点が注目される。調査時に社会の大きな関心事である東日本大震災を詠んだ作品が多くあったので、その数を調べると、短歌は一九八九首中一六九首で八・五%、俳句は二〇〇

二句中七九句で三・九五%であった。この結果を見ると、「老い」への関心は低いとは言えないであろう。

次に「老い」の入選数を選者別に調査すると

短歌

選者名	老いの選歌数 (総選首数)	%
馬場あき子 ^⑦	三六 (五三三)	六・七五%
高野公彦 ^③	三二 (五三三)	六・〇〇%
永田和宏 ^④	二四 (五三三)	四・五〇%
佐佐木幸綱 ^⑤	一四 (二九〇)	三・五八%
合計	一〇六 (一九八九)	五・三二%

俳句

選者名	老いの選句数 (総選句数)	%
金子兜太 ^⑥	二六 (五〇四)	五・一五%
長谷川権 ^⑦	一五 (五〇四)	二・九七%
稲畑汀子 ^⑧	九 (四九〇)	一・八三%
大串章 ^①	九 (五〇四)	一・七八%
合計	五九 (二一〇二)	二・九四%

のようになった。

選者別の年齢を見ると、最高齢が金子兜太で九三歳、八〇歳代が馬場あき子・稲畑汀子、七〇歳代が大串章・佐佐木幸綱・高野公彦、六〇歳代が永田和宏、五〇歳代が長谷川権となっている。八人中七人がいわゆる「老い」に突入しており、最も若い長谷川も六〇歳代目前である。

「老い」を入選させている数を割合から見ると、短歌選者では馬場あき子・高野公彦・永田和宏・佐佐木幸綱の順、俳句選者では金子兜太・長谷川権・稲畑汀子・大串章の順になっている。馬場あき子・金子兜太がそれぞれの分野で一位というのは、年齢的に「老い」を身近に感じているからだろうとうなずけるが、入選にした数は必ずしも年齢に比例してはいない。短歌では六〇歳代の永田和宏が七〇歳代の佐佐木幸綱よりも上位に、俳句では六〇歳代目前の長谷川権が「老い」を意識し始めているからであろうか、二位に位置する。

選者の創作理論や興味関心の影響があると思われるが、六〇歳代が「老い」を最も意識する年代、ボーダーラインと言えるかも知れない。

短歌は五七五七七、俳句は五七五、形式の異なる短歌・俳句でどのように「老い」が表現されているのであろうか。創作の場合、何をどのように詠むかが意識される。次は、「何をどのように」の面から探ってみることにする。まず、「何を」について調査した。今回の「何を」は「老い」であるが、その「老い」が誰の「老い」を詠んだのかについて、年齢と対象（自己の老い、他者の老い、自他の老い〈自己にも他者にも当てはまる老い〉）に分けてその数を調べてみると、

対象	年齢			
	合計	七十歳代	八十歳代	九十歳代
106	59	21	9	3
自己の老い	24 (22・6%)	5 (23・8%)	3 (33・3%)	3 (33・3%)
他者の老い	67 (63・2%)	6 (28・6%)	2 (22・2%)	2 (22・2%)
自他の老い	15 (14・2%)	7 (33・3%)	3 (33・3%)	3 (33・3%)
合計	106	21	9	3

のようになった。次に、他者の老いの「他者」（誰）、自他の老いの

「他者」（誰）を調べ、その内訳を表にすると

他者の内訳				自他の内訳			
父（含義父）	3	短歌	俳句	母（含義母）	2	短歌	俳句
母（含義母）	29 (43・3%)	7 (36・8%)		夫婦	3		4
父母	3		1	兄弟姉妹	3		
夫	3			若き人	1		
妻	4		2	老いの人	5		
兄弟姉妹	1			その他	1		
肉親	1			合計	15	4	
祖父	1						
祖母	4						
伯父・叔父	2						
友人	1		4				
その他	15		5				
合計	67	19					

の結果を得た。

まず、対象であるが、数の最も高いものは短歌の他者の老いを詠

んだものである。作品数が六七首で六三・二％、六割を越えている。俳句で見ると他者の老いを詠んだ作品は一九句で三二・二％と少ない。しかし、俳句でも六割を越えたものがあり、自己の老いを詠んだのがそれである。三六句で六一・〇％となっている。他者を詠むにはより説明のできる長い形式の短歌の方が適しているのかも知れない。

次に、読み込まれていた年齢と他者の内訳の作品数に着目してみたい。年齢とは短歌・俳句に読み込まれていた年齢のことである。長寿を祝う節目の年齢に、還暦、古稀、喜寿、傘寿、米寿、卒寿などの名称がある。年齢は順に、六〇歳、七〇歳、七七歳、八〇歳、八八歳、九〇歳で、「賀寿」として祝う。近年では、六〇歳の還暦は長寿というよりは現役感覚かもしれない。いわゆるお年寄りという感覚が薄い。長寿を祝う感覚があるのは七〇歳の古稀からであろうか。今回の調査でその感覚は現れていたように思われる。年齢別の表を見ると、七〇歳以上の年齢が詠み込まれていたのは短歌の方が二二首で、俳句の九句より数が多かった。俳句の約二・四倍の数であった。短歌二二首の中では八〇歳代が最も多くて七首あるが、このうちの五首は傘寿の節目を詠んだ作品であった。俳句の八〇歳代の三句ではすべてが傘寿を詠んだ作品であった。人生の節目となる賀寿は題材となりやすいのであろう。

続いて、他者および自他の老いを詠んだ作品の内訳の表を見てみたい。他者の内訳は自己以外の人の老いを詠む場合に誰の老いを詠んだのかを調べた表で、自他の内訳は自己と他者を詠んだと解釈できる場合の他者が誰に当たったかを、また、自己を詠んだとも他者を詠んだとも解釈できる作品の他者が誰に当たったかを調べた表である。他者の内訳の表を見ると、短歌・俳句の両者において母を詠んだ作品数が突出している。短歌においては二九首（四三・三％）、俳句においては七句（三六・八％）となっている。子の成長の過程で一番身近なのが母の存在で、また、平均寿命においても女性が上回っており、母の方が子の人生に長く関わることになる。この母は夫からすれば妻で、孫からすれば祖母に当たる。一人の女性が、妻、母、祖母と向かう相手により呼ばれ方が異なる。そこで、妻や祖母が詠まれた作品にひろげてみると、妻が四首（六・〇％）、祖母も四首（六・〇％）で、母・妻・祖母の合計は三七首（五五・二％）となり、五割を越える。一方の俳句一九句を見ると、母が七句（三六・八％）、妻が二句（一〇・五％）で、合計すると九句（四七・四％）になり、五割に近い。短歌・俳句のいずれも約五割であり、題材となる割合が高いと言える。自他の内訳の表では夫婦が多く、短歌では三首、俳句では四句あった。この場合の他者は配偶者である。

以上、家族や親戚、友人など自分にとって身近な人が作品の題材、対象となることが分かる。

では、自己或いは身近な人たちを「どのように」詠んでいるのであろうか。その詠みぶりを作品を通して探ってみる。

老化に伴って、病気や身体の変化が出てくる。足腰が弱り、物忘れ、認知症（惚け）などさまざまなかたちでそれが現れる。そうなった場合に家族においては介護という問題が出てくる。これらが短歌・俳句の素材として詠まれていた。素材の種類としては、元氣・長寿・敬老・白髪・物忘れ・惚け・介護・ホーム（施設）・人生（懐古・回想）・死（看取り）・社会・恐怖・孤独などであった。

この中から、長寿、「百歳以上」の作品を取り上げてみたい。短歌は五首、俳句は三句。短歌の五首の内訳は、一〇一歳が三首、一〇〇歳が二首で、いずれも他者の老いを詠んでいる。作品は、

- (1) 百一歳超え・・・優しき眼差しを夫人に・・・車椅子押す
- (2) 百一歳の母・・・我よりも食欲ありて独りのくらし
- (3) ・・・できるだろうか百一歳の母の運動会の選手宣誓
- (4) 百歳の祖母・・・髪の毛までおれば「この家の子になってけろ」・・・

(5) 長生きも良いもの・・・百歳がタワシのような笑顔で

語る

で、一〇〇歳を越えた母や祖母に対する作者のあたたかい眼差しが伝わる。これに対し、俳句の三句は、

- (6) またひとつ百に近づく難煮・・・
- (7) 福寿草百たび母に咲き・・・
- (8) 百近き巨乳の母・・・汗疹・・・

である。この中の(6)と(8)はまだ一〇〇歳に至っていないが、一〇〇歳に近いことは明らかに想像でき、その長寿を意識していることが伝わる。(6)は長寿の喜びを「難煮」という季語が持つ正月のめでたさに重ねて寿いでいる。(7)(8)の季語は「福寿草」「汗疹」で、これらも季語の本意を生かして「老い」を詠んでいる。

ここで、今回調査した作品の季語について触れておきたい。今回の五九句にどのような季語が詠まれているかを調査した。季語・句数・季節の順で、その結果を示すと、

敬老日	4	秋
生身魂	4	秋
月	2	秋
障子貼る	2	秋
木の葉髪	2	冬

福島忌	1	春
昭和の日	1	春
立夏	1	夏
更衣	1	夏
アロハシャツ	1	夏

大根蒔く	1	秋
渡り鳥	1	秋
灯火親し	1	秋
露	1	秋
薬塚	1	秋

陽炎	松の芯	風光る	白梅	紅梅	啄木忌	四月馬鹿	春眠	春	耕し	亀鳴く	初日
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	2
春	春	春	春	春	春	春	春	春	春	春	新年

十三夜	秋風	紅葉山	桐一葉	雁渡し	朝曇	草を刈る	向日葵	含羞草	涼し	汗疹	羽拔鶏
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
秋	秋	秋	秋	秋	夏	夏	夏	夏	夏	夏	夏

合計	福寿草	四日	雑煮	福は内	鬼やらひ	狩人	冬木	冬	冬近し	団栗
59	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
	新年	新年	新年	冬	冬	冬	冬	冬	秋	秋

のようになった。(福島忌は東日本大震災の日のことのため春季にした。)

最も多かった季語が「敬老日」と「生身魂」で、

敬老日 (9) 今日だけ・としよりらしく敬老日

(10) 出席と・・・忘れて敬老日

(11) 病む妻も事なく・・・敬老日

(12) 美しく老いて友・・・敬老日

生身魂

(13) 気が付けば・・・我も生身魂

(14) 硬軟の友・・・淋しい生身魂

(15) 嫌ひな人皆死す・・・いふ生身魂

(16) 生身魂新人賞・・・反応・・・

のように詠まれていた。(14) は友の淋しい姿を詠むのに、自身を生身魂とみなし、対比させて効果的に表現している。

「生身魂」(いきみたま) というのは、生きている尊者(父母や主人、親方など目上の者) に対して礼を行う日、また、その儀礼。生きている御魂を拝し、その生命力にあずかるという意味である。この行事はお盆の頃に行われる。故人の霊を供養するだけでなく、生きている年長者に礼をつくす日でもあるので、転じて、高齢者本人の意味でも使われる。現代の「敬老の日」(敬老日) と同意である。正岡子規に「生身魂七十と申し達者なり」という句があるが、明治期の七〇歳は人生五〇年くらいが普通だったので、相当な高齢だと思われる。現代で言えば、九〇歳くらいのイメージになるのではなからうか。掲出句はいずれも子規の言う達者な「老い」の姿が詠まれている、崇めるにふさわしい、めでたいとたたえている句と言える。このように「老い」をたたえた作品の一例を短歌から取りあげてみる。

(17) 傘寿まで日本語用しご褒美・・・「ことば検定」2級合格

(18) 花の下アルコル0の缶開けておしゃべり・高齢女子組

(19) 思うままに生きる者ほど長寿・・・卒寿の姉のタンゴの

さばき

(20) 歌を詠み碁を打つ九十八歳の舅・・・今も家長の風格

(21) 道挟み・園児はサッカー・老人・・・ゲートボール・

(22) 遺影にと撮り・・・写真若過ぎると撮り直すまで長く生

きたり

(23) 百グラムの肉を・・・ひとり食む八十五歳バースデー

の宵

これらの短歌の詠みぶりと先の俳句の詠みぶりを比べてみると、

表現の仕方に違いが見られる。俳句作家がこれらの短歌を見て、言い過ぎかも知れないが、内容の盛り込み過ぎや省略してもいい言葉があるのでは？と感じるかも知れないと思うのである。例えば、

(20) の短歌では、「家長の風格」を表現するのに「歌を詠」むこと、

「碁を打つ」こと、「九十八歳」であること、「今も」であることが

冠されているが、俳句の場合は、「今」を詠むことが前提条件で、

一句に中心があることが良しとされているので、この短歌では三句作ることができるということになる。また、俳句には季語を用いる

という制約があるので、音数の面から例えば『ことは検定』2級合格』のような言葉は音数が多すぎて俳句にするには無理がある。

掲出の短歌が劣っていると言っているのではなく、それぞれの形式や制約が表現に違いをもたらすと考えたいのである。では、音数が少ない分俳句の世界が小さいかというところではない。俳句には「切れ」という技法があり、また、季語を配するという点で世界に奥行きを持たせることが出来る。形式に即した表現をそれぞれが持っているのだと思われる。

次に、気持ち、感情をどのように詠んでいるかをみてみたい。

短歌からその一例を取りあげると、

(24) ケア施設へ見舞へば義母・ベランダにスカイツリーの見ゆる・・・自慢す

(25) 叱られて泣く義母・・・叱りつつ泣く妻・・・老老介護

(26) 金太郎飴のごとくに介護・・・老母と暮らす今日は日蝕

のように、介護の感情、介護される側の強がりや介護する側の辛さを描写することで表した短歌もあるが、

(27) わかっている病気が・・・言わせてるでもね母さん辛いよ私

(28) もう一人の自分にご苦労さんと・・・母が眠りに・・・ひと

とき

(29) 急がねばならぬ・・・この母が母であるうち聞かねばならぬ

(30) 字余りが効果を生みし短歌・・・そんな老後でゐたい・・・

(31) 認知症免れ得むか歌・・・詠み詰碁・・・せり鳥語も聴けり

のように感情がそのまま叙された作品もあった。

一方、俳句では

(32) 病院を終の住み処・冬近し

(33) めつきり・根気薄れ・障子貼る

(34) 笑ふだけの・・・・母福は内

(35) ふたりともよたよた・・・大根時く

(36) 団栗・如く転がり老い・・・

(37) 頻尿・月の明かりも物恋し

(38) 狩人も犬も老い・吹かれ・

と表現される。

「老い」にまつわるさまざまな感情が詠まれているが、これらを読むと印象が異なる。短歌からはせっぱ詰まった感じが伝わってくる。短歌は気持ちに中心が置かれ、その感情（筆者が付した傍線部）がそのまま叙されているからである。読者は短歌に表現された感情の流れを受け止めて共感する。しかし、俳句では(37)のように「物恋し」という感情語が含まれる句もあるが、大半の俳句は感情が表面に現れていない。その表現は避けられている。例えば(33)では老いの歎きを表現したいのであるが、「根気薄れし」程度にとどめ、障子を貼る行動に転化している。(35)も同様である。(34)は「笑ふだけ」のように目に見える表情で感情を表現する方法をとっ

ている。(36)では比喻を用いてユーモアに転じ、せっぱ詰まった心情を回避している。(38)では狩人の老いの侘びしさを言うのに「犬も老い」で「吹かれ」ゆくと動物に重ねて表現している。俳句は感情を表現したいのであるがそれは水面下に置かれ、目に見える事実が擬態語や比喩、物に重なる、或いは季語との結びつきによって表されているのである。つまり、読者は流れからではなく俳句の表現を丸ごと受け止めて共感する。それは、例えば(32)からでも言える。(32)は病院を「終の住み処」にしたというのであるから、死への恐怖や生への執着などの感情があるはずである。それを述べずに「終の住み処」だと言い切って、受け止めている。これに対し、短歌は(27)の「わかってる」「でもね」「辛いよ」や(30)の「そんな老後であたい」や(29)の「急がねばならぬ」「ねばならぬ」や(31)の「免れ得むか」のように表現されてその感情の中に浸っている。(28)は、「もう一人の自分のご苦労さん」とあって自分を客観的に表現しているが、現実の自分ともう一人の自分の感情は同等なのでその感情に浸っていると言える。つまり、短歌は感情に浸り表現されているが、俳句は感情を客観したり、俯瞰したりして表現されている。これが違いである。

次の短歌と俳句においても違いを指摘することが出来る。

(39) 齢とは失いし歳月・・生きていくから失える・・

(40) ・・・・死に近づきゆくのか死が・・・近づき来るのか五月の新緑

(41) 秋風・・・微笑むやうに古い・・・来る

(42) 徘徊を陽炎人・・・人は言ふ

これらは実態のない老いや死を思索的に、観念的に詠んだ点で共通している。短歌の(39)は「齢とは失いし歳月」「生きていくから失える」というように定義をするような仕立て(思い、思索の方に重点が置かれる仕立て)になっている。(40)も同様で、「五月の新緑」という季節感が配されているが「近づきゆくのか」「近づき来るのか」というようにやはり思い(思索)の方に重点が置かれる仕立てになっている。俳句における季語の置かれ方とは異なるのである。これに対し、俳句の表現は、(41)のように「古い」が「微笑むやうに」やってくると思案するものの、秋風の持つ寂しさに寄りかかった、響きあった表現になっている。季語と緊密に結び合っている。(42)も同様で、(42)は人間も「陽炎人」と断定(思索)しているのであるが、陽炎っている自然現象(山川草木)の中で、人間もまたそうなるのだと表現することで、「陽炎人」の境地がイメージできる仕立てになっていて、現実感が伴っている。

観念的な内容を詠む場合にも俳句では現実的に詠まれているという点を指摘することが出来る。

四

以上、短歌と俳句に於ける「古い」の詠みぶりを「何をどのように」の視点でみてきた。自己の古い、身近な人物の古い、古いそのものの思索、長寿、賀寿、介護などさまざまな視点・題材(素材)が詠み込まれていた。量的な違いは、選者の興味関心に依るので一概にまとめることは出来ないが、「どのように」という点では、

○短歌は音数が多い分、状況説明が出来、そのことによって流れが出来る。短歌は流れの中で読者は共感する。俳句は音数が少ない分流れが出来ない。その代わりに、季語を配したり、切れを作ることによって世界に奥行きが出来、読者はその世界を丸ごと受け止めて共感する。

○短歌は情(思い)に浸って表現されるが、俳句は情(思い)に浸らず、物との取り合わせや季語との関係の中でそれが表現される。俳句は現実感を伴って表現されている。俳句の表現の基本は写生と言われるのも、寄物陳思・即物具象と言われるのもこれに要因していると考えられる。

とまとめることが出来る。

短歌と俳句の形式(音数や季語を配するなどの制約)の差が、表

現の差（特性）を生み、それぞれの世界を作り出しているわけで、ここに短詩型の文学の特色を見出すことができる考える。

注

（1）調査対象を、二〇一二年の朝日新聞「朝日歌壇朝日俳壇」欄の一年間とした。

（2）馬場あき子 昭和三年生まれ。二〇一二年で八四歳。

（3）高野公彦 昭和一六年生まれ。二〇一二年で七一歳。

（4）永田和宏 昭和二年生まれ。二〇一二年で六五歳。

（5）佐佐木幸綱 昭和一三年生まれ。二〇一二年で七四歳。

（6）金子兜太 大正八年生まれ。二〇一二年で九三歳。

（7）長谷川權 昭和二九年生まれ。二〇一二年で五八歳。

（8）稲畑汀子 昭和六年生まれ。二〇一二年で八一歳。

（9）大串 章 昭和一二年生まれ。二〇一二年で七五歳。

（10）作品は著作権の関係で、「老い」に照準を合わせて理解できる範囲で抽出し、全部を示していない。・・・・の部分の省略の部分を示す。